

国税庁長官賞

税金で「助け助けられる」社会

目黒区立第十中学校 三年

泉 愛実

私は今年三月に大学を卒業して就職した姉がいます。初任給で、家族にピザパーティーを開いてくれてとても楽しかったです。そんな時、何気なく、姉が「初任給で所得税を初めて払った」と話してくれました。消費税はいつも払っていますが、「税金を払う」ことを初めて真剣に考えた瞬間でした。

今まで気にしてこなかったのですが、実は、私たちは色々な助け合いの中に生活を営んでいます。朝のゴミの回収だけでなく、交通整理、町の安全、救急や消防、中学校での授業やおいしい給食、テスト勉強の時は地域の図書館にもお世話になります。それだけでなく、災害救助やインターネットのネットワークの整備もすべて税金でまかなわれていると知りました。毎日、元気に学校に通えるのは当たり前のことではなく、すべて税金の助け合いの中でまかなわれていることだったのです。

これまで姉も私と同じように「助けられる」側だったのが、これからは税金を払い他の人を「助ける」側になつたのだと思いました。そんな姉をとても眩しく感じ、私もそうなりたいと思いました。

父にこの話をしたところ、「税金を払うのを嫌だと思ったことはない」と言つていたのが印象的でした。「税金は助け合い」なのだそうです。毎年、確定申告するのを、若い頃は面倒臭いと思つたこともあつたのですが、今はそうでなく、確定申告を通じて年に一度自分の財産について考えるきっかけを税務署の方々が作つてくださり感謝しているそうです。みんなが税金を払うことで社会の助け合いの仕組みがうまく機能し、社会が安定するのだと教えてくれました。

実は、一学期の授業で、太平洋戦争の体験談を聞き、戦争の原因をクラス全員で考えたことがありました。私は声をつまらし涙がでてしまい、そんな戦争の悲惨さを知り、その中で、欠食児童問題のような当時の日本の「貧しさ」が国を戦争へとつき動かした原因の一つだったと学びました。社会科の日本史の授業では、弥生時代に稻作が広まりせつかく国が豊かになつたのに、豊かになれた人となれなかつた人が生まれてしまい、「貧富の差」が争いの原因となり、やがて戦乱の時代へとつながつたと学びました。

戦後の日本人は、税金の仕組みを工夫して、お金のある人からそうでない人へと、お金を移動させて「貧富の差」を解消し、人ととの助け合いを通じ、安定して平和な社会を作つたのだそうです。それは、お金持ちにとつてもメリットがあることで、そのような社会に貢献したいと父は言つていました。日本の平和が戦後八十年間も続いたのは世界的にも歴史的に大変珍しいことで、それは税金の仕組みのおかげなのだと学びました。私も父や姉のようにつつかりと収入を得て、しつかり税金を納め、社会も自分も豊かになるように貢献したいと思います。